

21世紀の小児歯科医療に求められるものは

医療法人発達歯科会 おがた小児歯科医院

院長 緒方 克也



■ 略歴

1947年 熊本市生まれ
1971年 神奈川歯科大学卒業
神奈川歯科大学助手
1979年 緒方小児歯科医院を開設現在に至る

■ 現在 日本障害者歯科学会常務理事・日本歯科麻酔学会評議員・日本有病者歯科学会評議員・日本摂食・嚥下リハ学会評議員・日本小児歯科学会障害児問題検討委員会委員・神奈川歯科大学講師(非常勤)・福岡歯科大学講師(非常勤)

う蝕が氾濫した時代の小児歯科はすでに終息し、新たな理念を求められているのが今日の小児歯科である。そして小児歯科のみならず、医療全体が低成長国家という社会背景にむけて変わろうとしている。少子高齢社会では高齢者の歯科医療が小児歯科の需要をはるかに上回り、未来の国を背負う小児への歯科医療は霞んでしまいかねない。

う蝕の減少は小児歯科医に発想の転換を促している。歯を削らない時代、予防や治療後の管理が歯科医師の大きな責任として求められ、歯科医師と患者との関係が健康を媒体とした関係に変わる。しかも、歯科医師への期待は、長期にわたった管理であり、その中で管理の記録が大切になる。

小児への歯科サービスはう蝕の治療や予防といった内容から、より拡大されたものとなり、口腔機能の獲得、個別の管理の、歯科からの発達援助がテーマとなるだろう。そしてその内容は、インターネットなどの新しいコミュニケーション法を媒体として、地域の人々とつながりを持つ。

小児歯科の専門性はまさに発達・成長であり、また、EBM (Evidence Based Medicine) を基本理念とした歯科医療の提供にある。つまり地域の小児歯科医院には、かかりつけの歯科医と小児歯科の専門性の両方を兼ね備えた立場で、口腔の保健を通して発達の援助と科学的根拠に基づいた情報提供が必要とされる。

今後の歯科医師過剰時代には、歯科医療制度と医療保険の抜本的改革とで、小児にとって有利で、小児歯科医にとって目的の明確な医療が構築されなければならない。人が歯科医療と初めて出会う小児期のその出会いを大切にして、人のQOLに小児歯科医として参加するという考え方を展開するのが、21世紀の小児歯科である。